集団への適応とはなにか

津　守　真

毎年、四月になると一段と幼い子どもたちが幼稚園に入園してくる。それまでは家庭にいて、きょうだいや数人の子どもたちとしか仲間になったことのない子どもたちである。幼稚園に入園して、三十人、四十人というおおぜいの子どもたちの中にはいり、また、園庭や廊下ではもっと多くの子どもたちにふれて、だれでもとまどうのはあたりまえであろう。自分がほしいと思った玩具をだれかが使っているときにどうしたらよいのかもわからないし、目の前を、いろいろの人がいったり来たりしている中で、自分はどこに坐って何をしたらよいかもわからないでうろうろするばかりだという状態で、最初のころの日々を過ごす場合が多いであろう。いろいろのことができるにもかかわらず、自分のすべてのはたらきが停止してしまったかのように、立ちすくんでしまう子どももいるし、逆に、他の子どもと親しくしようとするあまり、押し倒したりうるさくつきまとう子どももいる。

こうして、二年を過ごして、幼稚園を修了するころになると、大部分の子どもは、幼稚園の中で何かしているようになるし、何もしないで立っているだけの子どもはごく少なくなる。入園当初は何もしなかった子どもが、いちばん活発におおぜいの友だちとあそぶ子どもになることもあるし、また入園当初は友だちと馴れやすかった子どもが、あんがい友だちの中にとけこむことがむずかしかったりする。そして、幼稚園修了のころには、すべての子どもが集団生活に適応できるようになっているかというと、簡単にそうはいいきれないのである。うまく集団生活をしているようにみえても、そのために非常にエネルギーを使い、緊張している子どももあるし、そのような子どもにとっては、幼稚園生活はどのくらいの期間が望ましいか、また一日のうちどのくらいの時間がよいのかも考えてみなければならぬ問題であろう。集団生活に早くから適応させねばならないというようには、簡単にいいきれ

ないことである。

ひとりの生活と集団の生活

幼稚園は集団生活の第一歩だというと、幼稚園の集団の側面だけに目をとめやすい。しかし、おとなでも子どもでも、常に集団にさらされていることは苦痛であろう。集団の中にあっても、個人の生活がなければならないし、幼稚園は子どもの個人の生活にもっと目を向けなければならないと思う。皆と同じように行動するのが望ましいとはいいきれないであろう。むしろ、みんなの中にありながら、自分自身の個性を保って行動し、生活することがたいせつであるし、幼稚園の集団生活にはそれだけのゆとりがなければならない。みんなで集まるときにそこにこなかったり、みんなとは違った行動をすると、その子どもは集団に不適応とみなされたり、困った子どもと見られたりする。しかしそれは狭い見方である。集団生活をはじめたばかりの幼児に、そんなに性急に狭い見方をしてはならないのである。初期のころに集団からはみ出た子どもたちが、幼稚園を終わるころには、最も積極的に集団を作りあげていく力をもつ子どもたちとなっていくのも少なくない。また、幼稚園にいる間にはそこまでいかなくとも、小学校中学校と進む間にそうなっていくであろう。

集団生活は個人の生活を中にふくんだものであり、子どものひとりひとりが自分自身となって活動することができるときに、創造的な集団として成長していくのである。幼稚園の生活は、全体としては集団であるけれども、その中では個人の生活が十分にできるようになっていなければならない。まわりで他の子どもたちが他のことをして遊んでいても、一人で自分の作りたいものを作ることができるようになっていることがたいせつである。

空間と時間

だから、子どもがひとりでいられる空間と時間が必要である。いつも机のまわりにぎっしりと坐っていなければならないような空間は、幼稚園の生活には向いていないといえる。むしろ、子どもが数人で落着いて何かを作ったり、本をみたりすることができるような場所がいくつもあるのがよいのである。このことは子どもの活動とも関係があり、たとえ同じ机の場所であっても、自分で打ちこんで仕事ができるならば、そこは自分の空間となり得る。けれども、子どもが静かに何かをしたいときにはそうできるような物理的空間が備えられるならば、もっと自分の活動に打ちこみやすいであろう。子どもたちが、階段の下の隅や、人目につかない場所を好み、数人で入りこんで遊んでいるのは、このような空間を教育的にとり上げる必要を示すものである。

時間の上からも、子どもが自分の活動に打ちこむことのできる

時間を必要としている。始終全体の動きにしばられて生活するような時間であってはならないのである。そうなれば、子どもは表面はそういう生活に適応するが、自分自身で打ちこむ活動には無感動になり、自分の生活を失ってしまう。

ひとりで楽しんで仕事をつくり出すことのできる教育

小さいときから集団で生活する訓練が必要だといわれるが、あまりそれを強調すると、集団の中でなければ生きられない人間を作ることにならないであろうか。いつも集団の中にいないと不安であり、ひとりではいられない人間になりはしないであろうか。すでに現代はそうなりつつあるといってもよいのかもしれない。

現代人は集団の中にいながら孤独だといわれるが、それだけ現代の都市生活、社会生活には以前にはなかった厳しさがあるのであろう。その反面、現代人は集団あるいは大衆から離れることに対して極度に敏感な点もあるのではなかろうか。集団の中にはまりこむこと以外の生活が考えられなくなってしまっているのではないだろうか。それだから、集団の中で活動することのたくみさに比して（それも本当の意味でたくみなのではないであろう）自分ひとりでも楽しく創造的な仕事をすることに不得手なのである。しかもこのことは、これからの世界にとって大へんに重要な問題である。幼児のうちから、集団によりかかり、集団にしばられていなければ生活できないようなことになってはならないと思う。集団生活でありながら、その中で、自分のひとりの生活をすることができ、自分の活動をつくり上げることのできる生活が必要である。そして、人間の集団は、多様な個をふくみながら発展していくのである。

家庭と集団生活

ところが、ここに現代の都市生活における家庭の変化という現実問題がかかわってくる。幼い子どもをもつ家庭の多くは、一日の大部分、母親と一人か二人の子どもが、狭い住宅の中で生活している。自然環境からも切りはなされ、高層住宅では周囲に土もなく、樹木もない。花壇もなく動物もいない。また、近隣の生活からも切り離され、近所づきあいもないし、子どもの仲間もいない。家庭生活の伝統からも切り離され、背骨となるモラルもない。子どもはひとりの時間の多くをテレビにとられて、自分でつくり出す生活を知らない。母親は教育のことを考えるときには、子どもの生活からはかけ離れた高度のことを考えて、幼い子どもを保育する喜びを経験しない。

幼稚園で新入園児をうけとるときの、子どもの生育状態はこのような状態である。現代の幼稚園はこういう特殊な課題を負っている。

いろいろの子どもを受けとることのできる幼稚園

幼稚園に入園する子どもの性格や発達の程度は、子どもによっていろいろである。その子どもたちをみていると、ある子どもは幼稚園のような集団生活をするのはまだ早すぎるのではないかと思われることがしばしばある。幼稚園にきてもあまり口をきかず、動かず、先生も気になり、あせって何かをしようとするが効果がない。子どもも集団の中にいることが苦痛のようである。親は集団になれるようにしておかなければ学校にいってから困るだろうと、幼稚園に入園したころから心配したり、子どもが幼稚園にいくのをいやがるようなそぶりを少しでも見せると、直接、間接に子どもに圧力をかける。こういう子どもを幼稚園に早くなれさせようと努力することが果たしてよいことなのだろうか。以前だったならば、幼稚園にいかないでもすんでしまったであろう。幼稚園に入ったばかりに、集団不適応児になったり、情緒障害児とされたり、登園拒否児になったりする。これは子どものせいではなくて、幼稚園に入る時期が早すぎたのである。

こういう例は人数にしてもかなり多いのではないかと思う。

幼稚園の受けいれ側としてはこういう場合どうしたらよいのかという問題がある。このような子どもたちが、集団不適応児とみなされるような集団にしなければよいのである。

つまり、どんな子どもでも適応できるような集団をつくることがたいせつなのである。それはどのような集団であるか。

第一に、あるふるまい方をしなければ、よい子でないような場面がたくさんあるような集団は、不適応児を作る。このような点からいうと、しばしば集まったり解散したり、集まったり解散したりするようなプログラムは適応するのにむずかしい。みんなと同じ方向をむいて、同じことをするように要求するのは、この年齢の幼児には適切でない。

第二に、それぞれの子どもが、性格や発達に応じて自分の活動をすることのできる集団であることが必要である。これをつくっていくのには、先生がひとりひとりの子どもとしっくりとつきあって、ひとりひとりの子どもの気ごころを知っているということが重要になる。幼児の教育の実際はそのことが根底になって成り立つのである。このことは集団指導と矛盾するのではない。集団をみるからひとりひとりは見られないというような集団指導ではこまるのである。このようにみると、ある時期にはひとりで他の子どものするのを見ているだけの子どもがあってもよいのであるし、性急にみんなと同じ方向にもっていこうと試みないでよいのである。むしろ、その子とつき合いながら、その子どものことがわかっていくことがたいせつである。

どんな子どもでも入っていけて、自分としてふるまえる場をもつことのできる幼稚園が必要である。